

\*\*\*\*\*

## 大学院という幸福

廣瀬 富男

大学院の科目を提供することになり4年目にして初めて受講生が現れた。内容が「生成文法」だけに履修する学生などそうはいまいと高を括っていたのだが、時には志向が合うこともあるようだ。

現在読んでいるのは、受講生の関心を考慮して、昨年 MIT Press から Linguistic Inquiry Monographs シリーズの一つとして出版された Phil Branigan の *Provocative Syntax*。ミニマリズムを採用し、移動現象を包括的に扱う仕組みを提案している野心作である。

さて、授業であるが、学部と違い、あまり「教える」という意識がない。学部の授業は、相手も素人で、少しでも「生成文法」の思考法に馴染んでもらいたいと思うから、理路整然とした解説を心掛ける。それに対して、大学院生、殊に「生成文法」の何たるかをそれなりに理解している相手だと容赦がない。扱っている内容が理論展開の最前線ということもあるのだが、明快な説明への腐心などはどこへやら、一学徒に戻り、目の前に座っ

ている前期課程に入ったばかりの学生に矢継ぎ早に問いかける。いきおい語り口もぞんざいなものになっていく…。

「そんな、LFでは中間痕跡が全部消えてなきゃいけないって言ってもさ、そんなことしたら、Which picture of himself did John say that Bill liked best? なんか困るんじゃない」

「えっ？」

「だって、himselfの先行詞って、Johnでもいいんでしょ? でもって、その解釈を可能にするのは、中間痕跡なんじゃない」

「あっ、そうですね」

「Braniganが出してる例は、The students asked what attitudes about each other the teachers had noticedだから、中間痕跡が関係しないんだよ。何だかねえ…」

こんな具合に、まるで勉強会や研究会にでも参

加しているかのように授業をしていると、90分はあつと言う間で、気がつくとき計が13時近くを指していることも多い。付き合わされる受講生には

申し訳ないが、少なくとも研究室にいる間、学務に苛まれ、研究に没頭しづらい状況にある当方にとって、大学院の授業は至福の時間となる。

\*\*\*\*\*